

終末期入居者の一時帰宅実現

女性患者の要望に対応

老人ホーム「アニカ足寄」



「その人らしさ」を大切にし、地域の終末期医療を担うアニカ足寄。3月には入居者の一時帰宅を実施した

【足寄】末期がんや難病を抱える人を対象にした医療特化型住宅型有料老人ホーム「アニカ足寄」(町南5ノ3)で3月、家族らの要望に応え、終末期医療の入居者を一時帰宅させるプロジェクトが行われた。看護師や介護士らが話し合いを重ね、血圧や意識レベルなど細心の注意を払いながら実行した。入居者は自宅に戻り、家族と最高の時間を過ごした。(佐藤隆聡)

アニカ足寄は、アニカホ 社長 が運営する有料老人ホーム(東京、鐘ヶ江紗里)ホーム。地域の終末期医療

を担い、残された時間を自宅に近い環境で過ごすことができる。鐘ヶ江社長は元陸上自衛隊の幹部隊員で、看護師として海外派遣の経験を持つ。一時帰宅をかなえたのは、指定難病患者の女性(76)。3月下旬、足寄町内の自宅に半日程度戻り、夫や長女、愛犬との再会を果たした。

この女性もともと、帯広市内の病院に入院していたが、回復の見込みがなく、地元の足寄に転院した。転院先には面会制限があり、3月中旬、ケアマネジャー(介護支援専門員)に相談してアニカ足寄に再転院した。

帯広に入院時は、夫が午前5時に足寄を出発し、毎日通っていた。アニカ足寄への転院は地元にある施設であること、面会制限がなく、看護師と介護士が24時間常駐するなど、医療依存度の高いケアを受けられる点を考慮した。一時帰宅に際しては、福祉車両を持ち合わせていないため、町内他事業所に協力を依頼し自宅までの送迎が実現した。同施設には終末期医療の患者が13人入居しており、今後も患者の体調やスタッフの体制を整えれば、一時帰宅の要望に対応する構え。

長は「常々『その人らしく』よりよい形で最期を迎えたい」と話している。一時帰宅が実現できたことについて「できてよかった」と話している。

メディカルマネジャーの方川亜華峰さん(37)は「終末期は刻々と進行してしまうので、タイミングを逃すと家族の元に帰れないこともある」と説明。鐘ヶ江社